

今が青春！ 障害と共生する 小竹愛子さん

「33歳から人生が変わりました」

6人姉妹の四女として生まれた小竹愛子さん(南千住在住)は、71歳(昭和12年)脳性まひによる四肢体幹機能障害(身体障害者手帳1級)です。

「訓練で、伝い歩きまでできたのですが」
戦争が始まり、疎開中にリハビリをすることができずに今、自由に動くのは、左足のかかとだけです。愛子さんは学校に通った経験はありません。

1900年に盲啞学校が開設され、盲児、聾児の就学が実現しましたが、その一方で教育を受ける児童に区分をつけ、富国強兵の考えの下に重度障害者の教育は無益と判断され、就学免除制度は戦後にまで引き継がれました。1979年(昭和54年)に養護学校が義務教育になるまで、本人および保護者の意思に関わらず、重度障害者の方の多くが就学猶予や就学免除の適用をされていました。このために愛子さんはずっと、家にこもっておりました。愛子さんに光をもたらしたのは、お姉さんのご主人の障害者手帳を申請しようとの働きかけでした。「恥ずかしいことはないのよ(愛子さんに障害あることが)」

当時は、障害のある人に対する偏見や差別が厳しく、6人姉妹なのに、愛子さんのことが聞かれるのが嫌で5人姉妹と言っていたこともあったようですが、お姉さんのことばに家族が変わりました。

「何かできることがあるだろう。」

生きがいを作ろう」

障害者手帳を取りに行ったのが転機となり、愛子さんは、荒川区障害者センター(現たんぽぽセンター)に通って、機能訓練をはじめました。障害者センターの理学療法士や作業療法士の熱意と愛子さんのやる気で左足の指が動く頃は、足の指を使い、一針一針刺繍もしました。荒川区の女性ではじめて、電動車いすを使用したのも愛子さんです。左足で操作出来るもので、荒川たんぽぽセンターで操作方法を1年半程かけて学びました。

「趣味はパソコンと音楽を聴くこと」

12、13年前から、毎週木曜日にアクロスあらかわで、足を使ったパソコンの操作を学んでいます。左足に補助具を付けて、パソコンを打ち、インターネットを使ったり、電子メールも60人位の方とやり取りが出来るようになりました。パソコンの操作を覚える過程で、字を覚えませんでした。「沢山の人に助けられて」

起きる・寝る・食事・排泄・愛子さんの日常生活は全介助。ヘルパーさん・ボランティアさん・他たくさんの人に支

えられて一日24時間を過ごしています。身体に大きなハンディをかかえながら、まだ自分にはできることがあるのではないかと愛子さんは前向きです。たんぽぽセンターやアクロス荒川でのたくさんのお友達との出会いは、元気の源になっております。

「無理をすると愚痴が出るから」

姉妹の中で手伝える方が無理なく愛子さんの介助をされています。姉妹が協力して愛子さんの誕生日に合わせて旅行に出かけたりしており、今年は三越劇場で観劇も致しました。

「今が青春」

笑顔で話される愛子さんは、飛行機や船に乗りたいとやりたいことが一杯です。

「外に出ましよう。お友達を作りましよう。あなたの出番は必ずあるはずですよ。」

障害を受け入れられずに家に閉じこもりがち人達に愛子さんは呼びかけています。

「生まれた時から障害があることに慣れているから、後から障害を持った人より強いかもれない」前に脳性まひの方が、言われたことを思い出しました。踏み出したことから開けた道。そこには想像絶する努力があったことと思います。障害を受け止めて、明るく前向きに毎日を大切に生きている愛子さんの笑顔は本当に素敵でした。